



Title	中学生における教室内の友だちグループ間の地位と進学先への意識の関連性：中学3年生を対象とした予備的検討
Author(s)	水野, 君平; 森田, 未希; 加藤, 弘通
Citation	子ども発達臨床研究, 14, 13-16
Issue Date	2020-03-25
DOI	10.14943/rcccd.14.13
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77561
Type	bulletin (article)
File Information	030-1882-1707-14.pdf



[Instructions for use](#)

資料

中学生における教室内の友だちグループ間の地位と 進学先への意識の関連性

— 中学3年生を対象とした予備的検討 —

水野 君平¹・森田 未希²・加藤 弘通³

Kumpei MIZUNO, Miki MORITA, Hiromichi KATO

要 約

本研究の目的は中学3年生が進学を考えている高校の選択および高校での所属グループの希望に対して、現在の所属グループの地位が関連するかどうかを検討することであった。そこで本研究は中学1-3年生707名へ実施した質問紙調査のうち、中学3年生253名の回答データから分析した。分析の結果、中学3年生の生徒は進学予定と考えている高校に対して、自分の属しているグループの地位に関係なく、どちらかというのと今と同じ雰囲気グループに属したいと感じており、また自分のグループ以外の生徒が進学先にいた方が良いと思っているという結果であった。最後に本研究の限界点を踏まえ、今後の研究の方向性を議論した。

キーワード：友だちグループ、グループの地位、進学先

Key words：Peer group, peer status

問題と目的

「スクールカースト」とは、「グループ」と呼ばれるインフォーマルな仲間集団 (e.g., 山中, 2009) の間に変動しにくい地位格差が生じることであり、所属するグループの地位が低い中学校の生徒ほど学校適応感も低いことが示されている (水野・太田, 2017; 鈴木, 2012)。そして、所属グループの地位は学年間だけでなく、学校段階間でも変わりにくい可能性が鈴木 (2012) から示唆されている。鈴木 (2012) では中学2年生に対して回顧的に小学生の頃の学校での地位 (「人気だったか」

を尋ねており、小学校で高地位にいた生徒ほど中学校でも高地位にいることを示している。鈴木 (2012) が用いた地位の指標は所属グループの地位ではなく、「人気かどうか」という個人に関するものであったが、学校移行後でも地位はある程度連続する可能性がある。

ところで、生徒を対象とした「スクールカースト」の研究は主に学校適応感 (e.g., 大久保, 2005) に焦点が当たることが多く (水野・太田, 2017; 水野・日高, 2019; 鈴木, 2012)、例えば進路に対する意識については検討されていない。進路を選択する際には生徒本人の学力は大きな要因となり

¹ 北海道大学環境健康研究教育センター 客員研究員/De Montfort University Academic visitor

² 北海道大学大学院教育学院 修士課程

³ 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

うるだろうが、「スクールカースト」での地位と学力はそれほど大きく関連しないことが鈴木(2012)から示唆されている。しかし、鈴木(2012)は学年間で地位が変動しにくい理由として過去の学級での地位がその時のクラスメイトからの評判で知れ渡るためであるとインタビューから示している。そのため、所属グループの地位が低い生徒ほど進学を考えている高校では他のグループの生徒がいることを避けることが予想される。

また、学校段階間で所属グループの地位が変動しにくいということを考える際には、生徒がそもそも今とは違う地位を望むのか、望まないのかを考えることも重要だろう。また現時点で進学を考えている高校では現在とは違う地位のグループに属したいかどうかにも重要だろう。すなわち、所属グループの地位が高い生徒ほど今と同じような地位のグループに属することを望むと予想される。

そこで本研究では中学3年生を対象にして、進学を考えている高校の選択および高校での所属グループの希望と現在の所属グループの地位の関連性を検討する。

方 法

協力者と調査の手続き

本研究で扱う最終的な調査協力者数は公立中学校2校の中学3年生253名(男子108名、女子126名、未回答19名)のデータであった。途中で回答をやめた生徒や1,1,1,1,1というように全て同じ回答をした生徒の回答を分析データから除外した。本研究で使用するデータは第二著者の共感性と攻撃性の関連における情動コンピテンスの調整効果を検討する修士論文のために実施した調査(公立中学校2校、中学1-3年生707名を対象)の中で取得したデータを用いた。

調査の手続きとして、郵送で質問紙を調査協力校に送付し、ホームルーム活動の時間で生徒が一斉に回答した後に回収し、返送してもらった。調査協力校の管理職に対し、すべての調査項目、および調査内容を説明し事前に倫理的に問題がない

かどうか、中学生でも理解ができるかどうかの確認および協議を行った。そして、倫理的に実施可能であるという判断を受け実施された。調査実施時に担任を通して回答は任意で強制ではないこと、回答しないことで不利益は発生しないこと、成績と関係しないことを教示した。また、質問紙のフェイスシートで上記のことと回答をもって研究の協力となることを再度教示した。

質問項目

グループの有無 まず「ここでのグループは班活動のグループではなく、休み時間などに一緒に過ごす友達とのグループのことを言います。また、グループの人数はあなたを含めて2人以上とします」と教示した。その上で「私にはクラスの中で、いつも一緒にいるようなグループがある」という項目について「ある」か「ない」かで答えを求めた。「ない」と回答した場合、グループに関する質問を飛ばすように教示した。

グループ内の地位とグループ間の地位 水野・日高(2019)の項目を若干改変して用いた。グループ間の地位(「私のグループは、クラスの中で人気だと思う」と「私のグループは、クラスの中で中心的な存在だと思う」)は2項目、グループ内の地位(「私は、自分のいるグループの中で人気だと思う」と「私は、自分のいるグループの中で中心的な存在だと思う」)も2項目で尋ね、「全くそう思わない(1点)」—「とてもそう思う(5点)」の5件法で回答を求めた。

進学予定校とそこでのグループについての項目

項目は独自に作成した。「進学する高校では今とは違う雰囲気のグループの一員になりたい」と「進学する高校は自分のグループ以外の人たちが少ない学校がいい」について、「全くそう思わない(1点)」—「とてもそう思う(5点)」の5件法で尋ねた。

その他の質問項目 その他の質問項目として、質問紙には情動コンピテンス、共感性、攻撃性、向社会的行動に関する尺度が含まれていた。これらの項目は本研究の目的とは異なるため報告しない。

結果と考察

まず、グループがないと答えた生徒は19.8%であった。次に、グループ内の地位およびグループ間の地位、進学先選択についての記述統計量を求めた (Table 1)。その結果、分布は極端に歪んでいないことが確認された。なお、進学先選択についての2項目の相関を調べたところ、 $r = .26$ ($p < .001$)と正の有意な相関が見られた。次に、進学先選択の項目について、平均点が理論的中点の3点と有意に異なるかを検討した。その結果、両方とも3点より有意に低いことが明らかとなった ($p < .001$)。

次に、本研究の目的を検討するために、進学先選択の項目を従属変数、グループ内の地位およびグループ間の地位を独立変数とした重回帰分析を行い、相関分析の結果も Table 2 に示した。なお、モデル中の VIF は2以下であり、多重共線性は無いものと判断した。分析の結果、いずれも有意な関連性は見られなかった。

以上の分析の結果、所属グループの地位と進学を考えている高校でのグループとは関連が見られなかった。また、進学先選択の平均点は全体的にやや3点よりも低いものであった。すなわち、どのグループに属する生徒でも、平均的には「ど

ちらか」と進学する高校では、今とは違う雰囲気

のグループにはあまり属したくないし、またどちらか」と自分のグループ以外の人たちが多い学校である」とい」と考えられる。また、この両者は正の相関関係にあり、「進学する高校では今とは違う雰囲気のグループに属したいと思う生徒ほど自分のグループ以外の人たちが少ない高校に行きたい」とも考えていることが示唆された。

以上のことを踏まえると、中学3年生の生徒は進学予定と考えている高校に対して、自分の属しているグループの地位に関係なく、どちらかというと同じ雰囲気のグループに属したいと感じており、また自分のグループ以外の生徒が進学先にいた方が良いと思っているという結果であった。このことは、「スクールカースト」での所属グループの地位は生徒の進学を考える際には重要視されず、進学先の高校を選択する際には、本人の学力や学校でやりたいと考えている内容がやはり重要である可能性を示唆するものと思われる。もしくは、鈴木 (2012) の示した小学校で人気であった子どもほど中学校でも同程度の人気があるという学校段階間の連続性を考えると、高校に行ったとしても違う雰囲気のグループには入れないのだろうという考えがあるのかもしれない。

Table 1 分析に用いた変数の記述統計量

変数名	N	M	SD
グループ内の地位 (信頼性の指標; 2項目間の $r = .83$)	191	2.32	0.92
グループ間の地位 (信頼性の指標; 2項目間の $r = .82$)	191	2.46	0.96
進学する高校では今とは違う雰囲気のグループの一員になりたい	207	2.69	1.08
進学する高校は自分のグループ以外の人たちが少ない学校がいい	207	2.70	1.13

Table 2 進学予定校への意識に対する重回帰分析と相関分析の結果

	進学する高校では今とは違う雰囲気のグループの一員になりたい			進学する高校は自分のグループ以外の人たちが少ない学校がいい		
	$b(SE)$	$\beta(r)$	p	$b(SE)$	$\beta(r)$	p
グループ内の地位	0.11 (0.11)	.09 (.11)	.35	0.08 (0.11)	.09 (.12)	.48
グループ間の地位	0.05 (0.11)	.05 (.11)	.62	0.07 (0.10)	.05 (.10)	.49
R^2		.01			.01	

注1) r は各独立変数からの単相関係数であり、すべて有意な値ではなかった ($ps > .11$)。

注2) 表中の p 値は回帰分析のものである。

本研究では学力等を考慮せず、11月時点での進学予定先でのグループや、選択する際に現時点での他グループの影響を単純に検討したに過ぎない。また、高校でのグループについて「今より地位が高いグループに属したいか」というように具体的な地位の上下については尋ねていなかった。そのため、今後は学力や進学先の学校の特徴(e.g., 男子校か否か)や生徒がそもそも今より人気のあるグループに入りたいかどうかなども考慮した上で、中学3年生から高校1年生の移行について追跡調査をすることでより詳細に検討することができるだろう。

引用文献

- 水野君平・日高茂暢(2019)。「スクールカースト」におけるグループ間の地位と学校適応感の関連の学級間差——2種類の学級風土とグループ間の地位におけるヒエラルキーの調整効果に着目した検討——教育心理学研究, 67, 1-11.
- 水野君平・太田正義(2017). 中学生のスクールカーストと学校適応の関連 教育心理学研究, 65, 501-511.
- 大久保智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 鈴木翔(2012). 教室内カースト 光文社
- 山中一英(2009)。「学級集団と友人関係」をめぐる諸問題への社会心理学的接近 兵庫教育大学研究紀要, 34, 23-34.